

結婚まで

磯井孝作著

著者

瀧

井

孝

作

發行所

小

山

書

店

(代

表

小山

久二

郎)

東京都千代田區富士見町二ノ一二
電話九段(三三)六八四番

印刷所

株式會社菅原鐵道印刷社
東京都新宿區大京町二八

昭和二十三年一〇月一〇日發行
「結婚まで」

定價

一七〇圓

目次

結婚まで 一

博打 七

八王子にて 五

隣一二軒 三

慾呆け 二九

春寒し 二五

住宅 二六

後記

結婚まで

信一は、笹島さんを彼女を戀して居る、この心持は段々にそれと自分に分つたが、信一は彼女をはつきりと思ふ工合になつても、この一ツの心持は誰れにも祕めてチツと堪へて居た。彼女に付いて知識は實になかつたが、姓だけで、名も年齢も、信一は未だ知らないのだが……。

其姓は、去年我孫子に居て初めてきゝ覺えた。近くの菅さんで、菅さんに向ひ夫人のてい子さんは「笹島さん」と曰ひ、笹島さんはある産婆の内に居たが、

もう一人立ちで開業のできる人と噂された。彼女は我孫子へは折々たづねてきたが信一は本人に會はなかつた。秋の日だつたか菅さんの京都に移る別れを惜む泊り客できたが、信一は其客の跡へ行つたら、長女のルリ子さんは信一に向ひ「今笹島さんを停車場でお見送りしてきたのよ」といつた。それは我孫子の枯葭などと共に憶ひ出される。

この七月十三日、栗田口で信一は、かざらぬ束髪のましろい手術著の笹島さんが、奥の病室より廊下へたち出た所を見た。夫人の看護にけさ京都にきた。「てい子のかんごは笹島さんなら安心だ」と菅さんのことばやまた産婆とおぼえて居た信一は、年のいつた婦人とのみ思ひこむだが、會ふと未だ若かつた。初對面の信一は改めて紹介はされなかつた。菅さんは「君は我孫子で會つたと思つた」とあとで曰つた。

信一は同く我孫子から移つた蒲生君の宅にをるのだが、この蒲生君たちに彼女は噂された。赤兒の假死で生れた折のことを。

「笹島さんはハル子の兩足をもち上げ逆様に振つてさ、我孫子の醫者はうろたへて笹島さんに叱られて見え、全く回春堂一人では危なかつたよ……ハル子よ、笹島さんはお前の恩人だよ」といふのだつた。

菅さんの宅で、信一は奥の病室へは行かなかつた。病人を疲らすと思ひ、また衰へたてい子さんに會ふと恐はいやうな心持だつた。で、笹島さんを近くで見たことは、七才のルリ子さんの發病の時からだつた――

七月の二十日、朝から少し熱のあつたルリ子さんは、病氣にはすぐ弱るれちで大人しく下にゐたが、寢床を出て一人で妹のチヅ子さんの便器に掛つた。それからすぐ奥へきて「青いうんこしたわ、この鏝と同じ色」とロオト硬膏の鏝をもち

上げてをしへた。熱は高かつた。すぐきた小兒科の醫者は「疫痢」とみた。

蒲生君が電話でよばれて行つた。信一は晩に見舞ひに行くとルリ子さんは座敷の方だつた。菅さんは「手あての手おくれないと思ふ」と曰つた。腸洗滌と云ふことや、食鹽注射や、ヒマシ油や、ヒマシ油は口に入れるとツキあげて傍の者まであぶらだらけだが、子供は「サイダーと一しよならのむ、あとで澤庵たべる、オルガン買つて下さればのむ」と色々にいづていやがつた。菅さんはオルガンの音は厭で前にも欲しいといはれて斷つたのだが、かふ約束した。得心したらヒマシ油は少し通はつた。皆んなの顔色は漸明るくなつた。次は再び腸洗滌で子供は實に災難にあつたが、笹島さんが器具を手に持上げるのだつた。彼女の白い手術著は油や水だらけだつた。

この晩、入院ときまつて京都病院の自動車が廻された。ルリ子さんは出際に「お

母さんにあはせて」と曰ひ、菅さんは泪ぐむで、「何だ、お父さんは泣いたりなどして」と自分にいつて、子供を抱きあげ奥の室へと立つて行つた。奥の室の夫人は大きい藁布團のうへに仰向きの容態だつた。

菅さんと蒲生君と附添ひで行つた。菅さんは麻布へやる知らせの手紙を信一に代筆させた。

粟田口に二人病人ができて信一は毎日手助けに行くのだつた。

ルリ子さんの経過は良好で、子供は、看護婦と亦知つた人と傍に居て欲しく、信一は日中居て、夕方蒲生君が代つて、十二時ごろお父さんが泊るのだつた。

菅さんは、宅のこんな状態についていふのだつた。「この頃ずつと寝不足で、僕は此夏中よく體が持つと思ふ位だ。僕よりまた笹島さんは上ヲ手だ。笹島さんはこちらにきて以來一ト晩も安眠をしないが、寝たと思つてもすぐ起きててい子の

結婚まで

結婚まで

水嚢を一時間目には取替へる。笹島さんは實によくつゞく。それで、倒れるとこまるモ一人たのまうか、と云ふと、看護婦は奥さんの爲にならばよんで頂いてもよろしいが、妾の爲云つて下さるのでしたら澤山です、といふ風だ」と。

今日も笹島さんは、三人の女中を用ふ家政もとつたが、疲勞の面持はなかつた。信一が宵の口、座敷で四ツのチヅ子さんの相手になつてやがて子供がうたゝねをしたら、彼女は湯上りの浴衣に手にうちはを持ち出てきて、睡入つた子供を抱き上げ寢室の方へ行つた。信一は、彼女がいつもの手術著でない浴衣がけは初めてだが、浴衣の上から肩や腕はわり合にはつそりしてゐてしなやかに目にうつるのだつた――

信一はこんな風で、笹島さんに毎日會ふのだつた。互に會ふあひだに信一は、「若し好きになつたらイヤそれも面白いだらう」とこんな考へを私かに抱くのだ

つたが、兩方獨り者でこの事の道德上の用心はいらなかつたが、亦この事に臆病の方ぢやなかつたが、宅の状態から何か悠くり語り合ふ機會はなかつたし、只毎日顔見合ふだけだつた。氣持はあつたがごく控へ目だつた。

さうしてこんな信一が歸る折には、彼女や女中や皆んな式臺に立つて見送るのだつたが、信一は皆んなに目禮する折殊に笹島さんの目もとには正しく目合せ、信一は何時もそれで別れて戻るのだつた。(信一は人を見送つた時に相手の目がふれなくて淋しく思つた經驗を持つたから) 亦こんな仕種から彼女の心持を次第に捉へ得たと思ふ……。

八月に入り、信一はべ切日の近づいた仕事に従つた。七日程ひきこもるのだつた。信一は机に向つて居ると頭の向きは段々粟田口に行きたくなるのだつた。笹島さんに彼女に會ひに。僅か一日二日書齋にひきこもつて過したただけだが、切り

に彼女に思ひは移つて仕方がないのだつた。一人居ると露骨にさうだつた。それでこの氣持の眞面目である自分自身に今更心付いておどろいた。

信一は「何であつても心持の芽生えは育てるべきだ」とこんな考へから、自分の戀心を大切に守る氣持だつた。此方の氣持だけで相手のそれは未だ圖ることはできないが、此方の氣持だけだつてもこれは好いなと思つた。

さうして、机から離れ今直ぐにも行きたくなるのだつたが、これちや仕事の方がダメだと思つてこらへた。仕事は、今仕事やれんと云つても自分は此生活を仕て居るのだからさういふ言譯は持てたが、仕事は捨てられないのだつた。が、彼女には會ひたかつた。信一は窓の向ふに、口ノ岡の山がさへぎつて居たから、

大比枝や、小比枝の山は、寄りてこそ、寄りてこそ、山は寄らなれや、遠妻、晴れと。

と云ふ東遊の一首を思ひうかべなど仕た。

さうして七八日目で信一は粟田口へ行つたら、菅さんの宅では夫人の病氣が大分快方に向いたと云はれた。

それは一ト月目で他の醫者にみせることとなつた。其産科のA博士はみて「前の醫者のてあてを止めてほしい、病氣をかう加工せずに、病氣を露骨にして見れば病源も分るから、その上で治す方針を立てる」といつた。A博士の態度のはつきりして居ることは氣持よかつたし、病人も得心した。で、さうした。それで前の醫者の注射など斷はつて、氷嚢も次第に退けて發熱もさがり、快方に向つたと云ふことだつた。これは大學病院などでも病源がはつきり分らず仕舞に病氣の治る例はある由をあとで聽いた。

「Iさん（初めの醫者）が如何にも人が善いので永くかゝつてゐたが」と菅さんは笑つて云ふのだつた。

また、ルリ子さんは退院できたが、未だ著物の上から腹部に小さい毛布を纏き著けて、妹達と一しよだつた。子供たちの食事の折、ルリ子さんは皆んなと一樣にたべたがると、情に脆いお父さんは「ルリ子は完全に治つて、笹島さんのおゆるしがでたら、上げる」と笹島さんの助けをかりて、子供に逆ふ役目はそちらに廻はすのだつた。笹島さんはいつも「女丈夫」でやつてゐたから。

晩飯の時、信一や蒲生君や菅さんの従弟のSさんや、皆んな客間から立つて行つて食卓につくと、菅さんは「夏すき焼は暑いけれど手がないからね」といふのだつた。笹島さんがコップの載つた盆か何か持つてきた。信一はこの時七八目で顔見合せたが、彼女の面てに一寸複雑な表情があると思つた。彼女はすぐには

づしたから、信一も何氣なく食事をした。

宵歩きに出て、菅さんは四條の襟店で「三十位の婦人の半幅の單帶」といつて、品物を見た。二タ色あつて「蒲生君、笹島さんにはどれがよいかね」ときいて、蒲生君は黒地に銀のウロコの模様をえらむだ。信一は「ウロコは下品だ、それよりは」と、水色の地に霞の模様のある別の一ト色を指した。信一は笹島さんの物なのでさう口だしたのだつた。それでそれに定められたが、また信一は「三十位の婦人」ときき、年齢は三十すぎかと思つた。自分は三十才だが、年齢は上でもよいなど思つた。

信一は段々に分つた自分の心持を友だちに語りたかつたが、語ればすぐに彼女が引合に廻され、つまり彼女に迷惑だつたらと云ふ場合が思ひやられた。未だ感情だけの場合で、事務とまで至らないから、他人にたのむ左う云ふ風には未だ思